農作物技術情報　第４号　畜産

発行日　令和６年６月２７日
発　行　岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編　集　岩手県農林水産部農業普及技術課　農業革新支援担当(電話　0197-68-4435)

「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/」

携帯電話用 QR コード

◆　**高温干ばつにより植生の悪化した草地は、播種適期に追播・更新が行えるよう準備しましょう。**
◆　**飼料用とうもろこしの生育期処理除草剤を遅れずに散布しましょう。**
◆　**新鮮な十分量の水、食いつきの良い粗飼料、ミネラル等の補給など飼料給与面からの暑熱対策も行いましょう。**
◆　**牛床を清潔かつ乾燥した状態に保つとともに、搾乳時に乳頭口からの乳房炎原因菌の侵入を防ぎましょう。**

１　牧草

（１）昨年度の夏期高温による草地の植生悪化について

令和５年の２番草の収穫時期は異常な高温と干ばつが続いたため、再生不良（夏枯れ）による牧草密度(被覆率)の低下が生じ、今年の一番草収量に影響を及ぼしている事例が散見されます。牧草の被覆率が 50％を下回る場合は、播種適期である８月末～9 月上旬を目安に追播や草地更新による植生の改善が図れるよう、準備をしてください。

（２）二番草の収穫

二番草の収穫時期は、一番草収穫後から 40～55 日が目安です。土壌及び牧草の水分が高く気温の高いこの時期は、牧草が蒸れ上がり易いので刈遅れないようにします。オーチャードグラスは、早めに収穫すると比較的栄養価が高い二番草となります。また、夏枯れしないよう、刈取り高さは 10～15cm（握りこぶし一つ分ぐらい）とします。

２　飼料用とうもろこし

（１）生育状況

飼料用とうもろこしは４～７葉期となり、生育期処理による雑草防除の時期を迎えています。除草剤散布にあたっては、天候に十分留意して作業を行いましょう。また、水はけが悪いほ場では湿害が懸念されます。葉の黄化が顕著な場合は根いたみによる施肥窒素の吸収不良が考えられますので、７葉期頃までに窒素成分で１～２kg/10a 追肥します。

（２）雑草防除

除草剤の茎葉処理にあたっては、雑草に薬液がかからないと効果がないので、雑草の発生を確認してから散布します。その際、発生している雑草種を特定して、効果のある除草剤を選択します。除草剤によって散布できる時期が異なりますので、使用基準を確認して防除してください。

（３）獣害対策

クマの食害を防ぐため、電気柵は７月下旬までに設置します。また、飼料用とうもろこし播種後にイノシシの被害が確認されたほ場では、早めに設置して終日通電させ、電気柵に触れると痛いことを学習させます。

電牧器は、通電時に最低 5,000 ボルトの電圧が確保できるものを選択します。電圧は定期的にチェックし、電圧が維持されているか確かめます。電気柵は下草に触れると漏電し、侵入防止効果が劣りますので、下草刈りはこまめに行うようにして下さい。また、アースの電圧も測定し、アースがしっかりと利いているか確認します。0.5kV よりも高ければ、アース本数の追加を検討してください。

電気柵の設置段数と高さは、クマ、イノシシ共通で三段張り、地上から 20cm、40cm、60～70cm が目安になります。地面が盛り上がったところやくぼ地には支柱を追加し、電気柵の高さが均一

になるよう調整して、漏電や隙間からの侵入を防ぎます。(図１)。

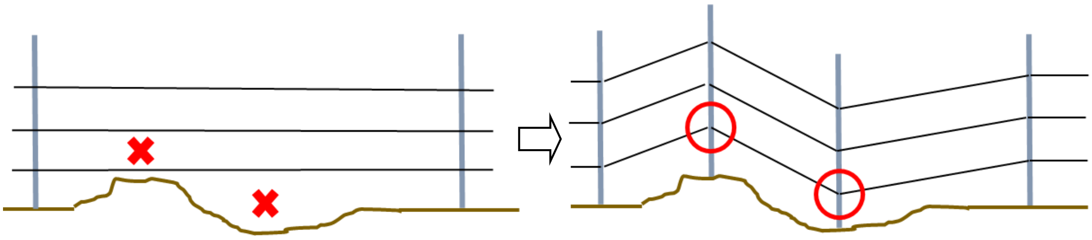

図１　地面の盛り上がり部分やくぼ地には支柱を追加

ほ場周辺の竹やぶやススキは刈り倒し、見通しをよくします（写真１）。軽トラ１台分のスペースが確保できると最良です。見回りがしやすくなるとともに、加害獣に電気柵を視覚的にアピールする効果が生まれます。

写真１　クマやイノシシに電気柵を認識させ、危険であることを学習させるのことが大切

３　夏季の飼養管理（乳牛）

（１）暑熱の影響の緩和

環境面の対策（農作物技術情報第３号を参照）に加えて、飼料給与面からの対策も行うことで、乳量、乳成分と種どまりを維持し、乳房炎と蹄の故障を予防します。栄養の充足、ルーメンアシドーシスの予防・緩和のため、飼料給与では以下に留意します。

ア　水

泌乳牛、乾乳牛ともに気温の上昇に伴い飲水量が増加するので、清潔な水をいつも飲める環境を整えることが重要です。水槽やウォーターカップの掃除をいつもよりこまめに行います。

イ　粗飼料

質の良い牧草やトウモロコシサイレージのやりくりが可能であれば、これらを通常よりやや多めに給餌します。消化性の良い繊維の摂取は、夏季に起こりやすいルーメンアシドーシスの予防・緩和とエネルギー確保に有効です。特に質の良い牧草は、乾乳後期から泌乳最盛期の牛に重点的に給与します。

ウ　重曹、ミネラル、ビタミン等

乳量の多い泌乳牛では、粗飼料摂取量、反芻回数、唾液分泌量が減少し、ルーメン内 pH の低い時間が長く続くので、重曹を給与（100～200g/日・頭）します。放し飼いであれば自由採食も有効です（写真２）。また、発汗等によりカルシウム、リン、マグネシウムの要求量も増加するので、乾乳後期牛を除き、通常の１から２割増で与えます。さらに、暑熱時の体温上昇で酸化ストレスが増加するので、ビタミンＥやセレンなどの抗酸化添加剤の補強も検討します。

写真２

放し飼い牛舎での重曹の自由採食

エ　給餌方法

（ア）涼しい時間帯（朝、夕方から夜間）の給餌量を増やします。

（イ）分離給与では、粗飼料を食い切ったことを確認してから配合飼料を給与します。給餌回数を増やし、１回の配合飼料の給餌量を減らします。牧草の摂取量を増やすため、牧草を細断して給与できれば理想です。

（ウ）ＴＭＲ給与では、選び食い防止のため、粒度が粗くないこと、水分を含んでいること（50%前後）を確認します。また、エサ押し回数を増やすことで、採食量を維持するとともに固め

食いを緩和します。

（２）夏季の搾乳衛生

夏季は、乳房や大腿部などの汚れが増えやすく、これにより大腸菌性乳房炎が増加しやすくなります。暑熱対策で牛のストレスを緩和するとともに、牛床を清潔に乾燥した状態に保つことと、乳頭口からの乳房炎原因菌の侵入を防ぐことが重要です。

ア　牛床の管理など

（ア）除糞と敷料の交換をこまめに行います。牛が横臥した時、乳房の下になる部分を中心に敷料を入れます。敷料が無い場合、滑り止めと除湿効果のあるケイ酸カルシウム資材を少量ずつ散布するのも有効です。

（イ）牛床に糞が落ちやすい場合は、ません棒が低すぎる（写真３）、隔柵がない、カウトレーナーの位置が適切でないなどの理由が考えられるので、ふん尿が尿溝に落ちるように調整します。

（ウ）乳房の毛が長いとふん尿などの汚れが付着しやすくなるので、乳房の毛刈りや毛焼きを行います。また、尻尾に糞尿が付着し、牛体後躯の汚れが目立つ場合は、尻尾吊り（写真４）が有効です。

写真３　ません棒が低いと牛体が牛床の前側に来て排泄

イ　搾乳作業

（ア）ミルカー装着前の乳頭清拭で「乳頭口のふき取り」を意識して丁寧に行います。また、ミルカー離脱後のディッピングは、乳頭表面全体のミルク成分を洗い落とすため、ノンリターン式のディッパーで乳頭の根本まで浸漬します。

（イ）ミルカー装着（前搾りから 90 秒後が目安）と離脱（ミルカー装着から５～６分が目安）を適切なタイミングで行い、過搾乳やライナースリップを避けます。

ウ　搾乳機器

搾乳機器の洗浄が基本通りに行えているか、搾乳ユニットやバルククーラーのゴムやパッキン等を定期的に交換しているか・劣化がないか、あらためて確認します。

写真４　尻尾吊り

次号は７月 25 日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
熱中症防止 ■日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。 ■帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。 ■暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。
農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

6月1日～8月31日は 農薬危害防止運動期間です	● **農薬散布時は、近隣住民・周辺環境に配慮しましょう** ● **農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう** ● **農薬は適切に保管・管理しましょう**